

双松会会報

第8号(「双松」通巻13号・「松高北高同窓会報」通巻第15号)

発行 松江市奥谷町164
島根県立松江北高等学校内 双松会事務局 TEL ④4888-④0655
印刷 有限会社 高浜印刷所 TEL ③3000



挨拶

会長 柴田 午郎



いま松江が直面している大きな問題に、宍道湖中海淡水化の問題がある。この方針が

決ったのは、戦後の食糧難時代で、その工事も進捗し、いざ実施という頃になると、世の中がすっかり変って、その必要がなくなったという、まことに皮肉なことになってしまった。

然し莫大な費用をかけたことであり、事業推進上の面子にかけても、是非実現したいのは官庁。いままさら必要性の少なくなった自然環境の大変革を實現しなくても、と考えるのは一般市民の感情。

この問題で最も苦勞すると思われる島根県知事は、先般交替して新に澄田知事が登場。県議会等での発言をきく

「天籟」復刻

校長 目次 健一



もう十数年前のことになるが、私たちの期では卒業三十年を記念して何かやろうという

ことになり、その一つとして「天籟」の復刻を思いついた。

「天籟」は長い赤山の歴史の中ではほんの一時期のものでご存知ない方も多いかも。今なら愛唱歌集とでも言える縦十一センチ、横七センチ、二百三〇頁の詩歌集である。奥付によると昭和十二年六月二十日印刷

と、今のところ当りさわりのない話で、右のものとも左のものとも分らないが、早晚結着をつけねばなるまい。出雲地方のみでもあるまいが、「さわらぬ神にたたりなし」という言葉がある。この淡水化問題について、腹の中では反対でも、直接利害関係のない場合は、知らぬ顔という人も、澄田知事のやり方を鶴の目鷹の目で監視しているに違いない。

宍道湖の七珍といわれるいろいろな魚貝類も、淡水化が実現すれば全滅するものも少なくない。今では全国の八割が宍道湖産という「やまと鯛」も、すでに漁業組合は数億円の補償金を受けている。いままさら「お返しします」と農水省へ持参しても受取らぬ。やむなく供託中ともきくが、先のこととはいえ、庶民の洞察力は弱い。

起雲館資料整理について

森安 章

昭和五十三年三月、北高は念願かかって西川津町から旧制松江中学の故地赤山に移転したが、新校舎に隣接して起雲館(同窓会館)が建設された。当時、百年史の編さんにあたった諸氏により、校史資料が収集され、資料室に展示された。それは質量ともに充実したもので、北高のみならず島根県の教育史の資料としても貴重である。

昭和六十一年は創立百周年にあたり、記念事業として二世紀に入ってから初の十年史が編さんされ、その際に収集した資料を保存するため資料室をさらに増設した。三浦校長の発案によるが、歴史をしのぶよすがとするためである。ここで新資料室について簡単に紹介させていただく。

部屋に入ると、まず漢学教師内村鱸香、中学時代の若槻次郎、英語教師ヘルンと校長心得西田千太郎、そして文部省がことあるごとに意見を聴いたという名校長西村房太郎の肖像写真が掲げられている。昔の教師や生徒にはすごいものがいたとつくづく思う。百有余年の歴史を誇る北高はあまたの人材を生んだが、かれらはその中で傑出しており異論のないところであろう。

現在の校歌を作詞したのは土岐善磨氏であるが、自筆の原資料が額に納められている。ところが卒業生の主婦が一部分くちがわっているのを発見されたのは、青天の霹靂であった。それは原案であって、なおさらのこと貴重であるといえる。

百周年式典のときの祝辞、挨拶の原本、提灯行列に使ったちょうちんは何十年後には一層重みをもつだろう。前川校長が在任中の訓話草稿「語り」は一級資料である。またヘルン・コーナーを設置したのも特色であるが、資料不足はいなめない。ヘルンが松江中学に赴任して百周年が数年後にせまっていた。北高の看板であるヘルンをわれわれはもっと大切にしなければと痛感している。

起雲館資料室はわれわれに何かを呼びかけている。最後にになりましたが校史資料をさがしております。ご提供くださいましたらよろこびます。

松くい虫

昨年わが校は創立百周年を迎えた。その記念に松中時代の校旗を新調し、起雲館の資料室を整備した。もう一つ、百年史も編集された。川津校舎が記録として登場するのは、これが最後であろうと思われる。五十三年三月十七日、離校式について十年史に綴られたことは深い感慨を催す。「坂のついた廊下、大きな屋根の体育館、立派でもない便所、鉄の扉のある図書館等...この校舎で三十年、一万四千名近くの者が巣立っていった。サウナ川津校舎」。今は県営プールとなった東側の一部に佐藤春夫の「望郷五月歌」の一節、「若かりし日のわが夢ぞそこに狭霧ふ」と刻まれた石碑がひっそりと静まっています。

赤山に再び上って今年で十年目を迎える。二本松も周辺六十九本の松も関係者大勢の方々から、その保存のための心遣いをいただいて、なかでも二本松は泰然とした姿で、見事である。「高槻のこすえにありて類白のさへづる春となりけるかも」(赤彦)の歌さながらに、赤山は春から初夏にかけては数々の小鳥の声、夏は蟬時雨と、高く、明るく、健康的で、すばらしい環境である。全国から学校訪問に來られた方々から、お褒めをいただくことに環境と校舎がある。校舎の方は毎日全員清掃で磨きをかけている。いつまでも汚さずにピカピカの状態を保ちたいと念じている。

さて昭和六十年度には、通常三十クラス前後のクラス数が、二十四クラスまでに減った。今春のわが校の三年生も八クラスであった。卒業生数が減少している。そんな状況の中にあつて今春の大学入試の結果は画期的なものであった。東大十三名、京大十九名、国立大学合格者総数三百二十二名は、質、量ともに他を圧倒するものであった。部活動においては、六月の総体において、男女総合第八位に終り、第二グラウンドの早急な整備等を含めて、人的、物的な部活振興策を積極的に推進してゆく必要性を痛感している。北海道で開かれるインターハイには、二十二名が参加する。秋の合唱部の全国制覇への期待も含めて健闘を祈念している。

昭和六十二年 第一回役員会開催

本年度第一回役員会は、常任幹事六十七名、校内幹事十八名の出席を得て去る六月二十二日(月)に一文字屋ホテルを会場に開催された。

昭和61年度 会務報告

5月26日 役員会(一文字屋ホテルにて)・会務報告・昭和60年度会計決算・昭和61年度会計予算・「双松」名簿会計中間報告・各期代表80名出席

双松会役員

- 会長 柴田 午郎 44期
副会長 能義郡伯太町東母里四八三
森脇 善夫 45期
川崎市麻生区王禅寺663-70
(松江市和多見町二三)

目次 健一(66期) 松江市奥谷町164(北高内)
景山一功朗 高2期
松江市千鳥町六四
吉岡 俊雄 63期
松江市八雲台一五一二三
難波 靖 高2期
松江市奥谷町三二三

双松会会則

第1条 本会は双松会と称し、事務局を松江市奥谷町一六四番地、島根県立松江北高等学校内に置く。(会員)

昭和62年度双松会会計予算書

Table with columns: 収入, 支出, 繰越金, 繰越金, 繰越金, 繰越金. Total income 3,840,000, total expenditure 3,615,000.

昭和61年度双松会会計決算書

Table with columns: 収入, 支出, 繰越金, 繰越金, 繰越金, 繰越金. Total income 3,709,214, total expenditure 3,004,774.

(目的) 第3条 本会は会員の親睦を厚くし、母校の発展を図ることを目的とする。

(役員) 第5条 本会に、次の役員を置き、任期は3年とする。

(役員) 第6条 会長、副会長、幹事、監事は、総会において選出する。

(役員) 第7条 本会の会議は次の四つとする。(総会) 第8条 総会には必要に応じて会長が招集する。

(役員) 第9条 総会においては次の事項を行う。1. 会務の報告 2. 予算の審議及び決算の承認

(役員) 第10条 役員会は会長が招集する。役員会は毎年一回開くことを原則とし、これを総会にかえることができる。

て構成し、会長がこれを招集する。第13条 常任幹事会は、次の事項を審議し、決定する。

第14条 専門委員会の委員は、会員若干名を会長が委嘱し、会長がこれを招集し、緊急を要する事業を推進して、目的を達成する。

第15条 会長は本会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代行する。

第16条 本会は顧問を置くことができる。第17条 本会の会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

第18条 本会の経費は、次の収入をもってこれにあてる。1. 入会金 2. 寄附金

第19条 本会には、次の役員を置き、任期は3年とする。1. 会長 2. 副会長

に2名の役員をお願いすることに。第20条 監事は山本善吉、伊藤春美両氏が退任された。長年のご苦労に感謝したい。

第21条 出場の個人負担は平均7万円程度になるので、できるだけ1人1万円程度の補助をお願いしたい。

第22条 本年度の役員会をむらぐも会館で開催。役員の出席は13名、事務局より3名が出席。

第23条 本年度の地域同窓会は、日立52年度の4同窓会があり別表のように3万5千円が支出されている。

第24条 本年度の役員会をむらぐも会館で開催。役員の出席は13名、事務局より3名が出席。

第25条 本年度の役員会をむらぐも会館で開催。役員の出席は13名、事務局より3名が出席。

通信制同窓会役員名簿

- 会長 藤原方也 43西谷木工所
副会長 徳田哲夫 41弥栄村役場・野津裕 43マツエディーゼル
理事 山本輝二 38・小野徳次郎 39共進自動車・屋敷数雄 39美都町役場・瀬崎鶴夫 43日立安来・高木恵美子 45国立松江病院・今岡江美 46家庭・吉田シゲ子 47家庭・高橋政江 47村田製作所・春木智 48日立安来・上村一美 49家庭・横山信子 51日原共存病院・加藤未鳥 51平田市立病院・渡部博 52吉田慶協・大江範江 52日立安来病院・正木和子 52県立中央病院・田中誠 52日立安来・坂垣真裕美 53山根内科医院・杉原之栄 54松江市立病院・山本敏明 55佐田中学校・鳥本芳雄 55木村屋給食パン工場・多久和京子 55家庭・大床敏 56木村建設・新原正雄 57ベックショップ・マルシン・岩浅利正 58岩浅電子・永島修司 58日立安来・小前勝房 59海士町役場・布野良市 59出雲市水道局・青木由利子 59エイコー電子工業・浜村治夫 60米子宇部生コン出雲・清水能成 60日立安来・平塚治子 60松村病院・海透晃司 61ホテル栄道湖・西村繁 62島根県警センター

昭和61年度決算 収入 支出 繰越金 繰越金

昭和62年度予算 収入 支出 繰越金 繰越金

無念！男女総合八位

今年度の総合体育大会は、前期、六月六日から八日、後期は十二日から十五日まで、松江、出雲、浜田を中心に開催された。本校からの出場選手は総勢四〇〇余名。昨年の雪辱を期してこの一年練習に励んできたが、結果は男女総合八位という成績に終わった。

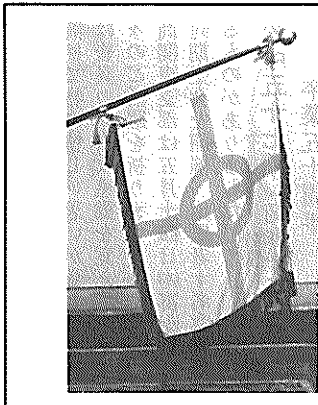
62年度県高校総合体育大会

特に活躍がめ

だったのは、バトミントン部女子の総合優勝、漕艇部男子、シニェルフォアの優勝、バスケット部女子の準優勝はみごとであった。総じて女子の部の活躍がめだつ大会であった。晴れの舞台で実力を発揮するためには、日ごろの練習は勿論だが、精神力の練磨がいかに大切なことであるかを痛感した。

印にし、それを実践して来たのが北高であった。捲土重来——を合言葉に部活の諸君は現在炎天下で練習に汗を流している。成績は次の通りである。男女総合成績 第八位(36点)

松中校旗新調される



卓球部	男子	ベスト8
水泳部	男子団体	四位
	男子100M自由形	二位・富永
	男子100M平泳ぎ	三位
	男子200M平泳ぎ	三位
	男子200M個人メドレー	三位
	男子400M個人メドレー	三位
	男子400Mリレー	三位
	男子800Mリレー	三位
	男子200M自由形	一位
	男子400M自由形	一位
	男子100M脊泳ぎ	二位
	男子200M脊泳ぎ	二位
	男子400M脊泳ぎ	二位
	男子800M脊泳ぎ	二位
	男子100M自由形	一位
	男子200M自由形	一位
	男子400M自由形	一位
	男子800M自由形	一位
	男子100M脊泳ぎ	二位
	男子200M脊泳ぎ	二位
	男子400M脊泳ぎ	二位
	男子800M脊泳ぎ	二位

国公立322名過去最高

昭和六十二年入試では国公立大学の入試制度の改革が行われた。主な改正点はABC群のグループ分けと共通一次試験前の二次出願の二点である。今までに経験したことのないことで当初生徒も教員も不安を持っていたが、模試等の成績は一進一退であった。最後の最後まで教員も生徒も一生懸命頑張った結果、入試制度改正のメリットを最大限に受けたのが我が北高であった。

今春の進路状況

東京大学13名、京都大学19名、東京工大4名、広島大学37名等々過去に例がない数字が並んだ。国立大学合格者数三百十二名はもろん過去最高である。また公立、私立についてもそれぞれ健闘が目立った。東京都立科技大では十倍をこえる競争率を突破して合格した者もいる。また私立では東京理大の17名早稲田14名等計二百三十八名の合格者を出した。今年度は異色の合格者も多くあった。本校昭和27年卒の大先輩が立教大学の英米文学科に合格したり東大理一から最難関の東大理Ⅲに再合格した人もいた。今年度入試をふりかえって予想以上と見る向きも多いと思えるが、生徒と先生が一体となって地道に努力してきた結果である。この勢いを来春、再来年にひきつづいていかなければならないと思う。

寄稿

あゝ山本幡男君(その四)

松中四十六期 田平 式

昭和二十八年二月ソ連内の抑留者に慰問小包を送ることが許されたので、もじみさんは早速心をこめて写真や子供たちの作品も入れて小包を送った。一九五三年五月十八日小包が無事着いた。一家揃って撮った写真を見て皆元氣そうであった。何と彼も心づくこの品々有難う。だが今後は心配いらぬから小包など送らぬように、特に文房具など無駄になるから送らぬように隊床中に受取ったせいか小包が実に嬉しく有難く毎日三四回写真を見て生きているお呉れ。さよなら 幡男！折角心づくしも、規則によって非情なソ連官憲によって押収されるが検閲もありあからさまにそうとも書けない。ある帰還者は死亡者名簿を作った秘かに日本に持ち帰ろうとしたが、ナ

関が目立った。東京都立科技大では十倍をこえる競争率を突破して合格した者もいる。また私立では東京理大の17名早稲田14名等計二百三十八名の合格者を出した。今年度は異色の合格者も多くあった。本校昭和27年卒の大先輩が立教大学の英米文学科に合格したり東大理一から最難関の東大理Ⅲに再合格した人もいた。今年度入試をふりかえって予想以上と見る向きも多いと思えるが、生徒と先生が一体となって地道に努力してきた結果である。この勢いを来春、再来年にひきつづいていかなければならないと思う。

昭和61年度進学状況学校種別

(昭和62年4月集計)

	59年3月			60年3月			61年3月			62年3月		
	現	卒	計	現	卒	計	現	卒	計	現	卒	計
国立大学	163	63	226	131	71	202	161	49	210	236	76	312
公立大学	17	9	26	7	3	10	5	7	12	6	4	10
私立大学	188	186	374	115	203	318	94	179	273	129	109	238
短期大学	83	6	89	125	1	126	81	5	86	74	7	81
その他	44	4	48	38	1	39	34	2	36	34	3	37
合計	495	268	763	416	279	695	375	242	617	478	200	678
クラス数	10			10			8			8(国公立大複数受験)		

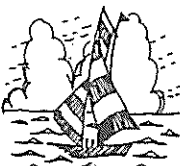
学園祭

昭和六十二年

統一テーマ 「われら……可能性！ 自己の未知なる力を信じて！」
期日 文化祭 九月十一日(金)十二日(土)
体育祭 九月十三日(日)

- 文化祭
 - 講演 講師 黒田瑞夫氏
 - 文化部展示
 - 映画会
 - パザール・食堂
 - 北高フォーラム
 - フリートリック(旧北高生の主張)のど自慢
 - 北高コンサート
 - 二年ルーム出し物
- 体育祭
 - 競技
 - 北高ベージュント(旧仮装行列)
 - フイナール(ソーダ節等)

ホトカで乗船まぎわにソ連官憲に発見されたため帰還を取消されて奥地へ送られた二十五歳の重刑を科されたことさえあるという。ハバロフスクで幡男君と起居を共にし、後幡男君の遺書の手紙を傍下に隠して持ち返り、もじみさんに届けて呉れた瀬崎清氏の話を、小包の着いた喜びにあふれた手紙を、最後の行に近く「病臥中」とあるのに気付き「夫は病臥している……不安はつるばかりだった。酷寒のシベリアによりやく遅い春が訪れかけようとする三月頃から幡男君は咽喉が腫れて収容所内の病院に入院することとなった。扁桃腺だろと考えていたが、五月になると耳に多量の膿が出た。ただの中耳炎ではないらしい。頼りない収容所の医者はただ場当たりの対症療法でお茶を濁しているに過ぎなかった。もじみさんからの慰問小包が着いたのはこの頃のことだが、幡男君には病状を書く自由は与えられておらず、千万の想いをこめながら、ただ「病臥中」とだけしか書けなかったのだ。また今年も収容所で冬越しせねばな



名刺たより

松中五十三期(昭和八年卒)

田 辺 壘

五月二十四日(午後二時より臨水亭(松江市京店)に於て昭和六十二年度五三会総会並懇親会開催の案内状を発送致しました。



本年は特に福類 正君 (61・9・10)逝去) 双松会副会長 森本 正紀君 (61・12・15)逝去) と二人の会員を亡くしたので追悼文を書く様連絡致しました。その結果別紙の如き追悼号を作成致しました。ところが本年に入り

伊藤 正夫君(62・4・1)逝去) 前島 俊雄君(62・5・2)逝去) 高橋 孝道君(62・5・20)逝去) と相ついで三人を亡くしました。随つて總會に於ては五人の黙禱を捧げることとなり古籍を越えればやはり人間の寿命のはかなさを痛感致しました。出席者三十四名代表幹事の挨拶、近畿代表の挨拶その他形如く總會を終了。本年は役員改選の時期に当り、万場一致全員留任。明六十三年度は五月二十二日(日)に決定。当日は本年八月より就航の安道湖遊覧船に乗船。安道湖の探勝等趣向をかえての企画を発表致しました。思へば第二十三代校長須貝太郎氏提唱の「大気分」を如実に実施した。森本正紀君(ボート部)四年修了、旧制松高、京都帝大医学部を卒業、郷里に帰へり医業を継ぎ又島根県医師会副会長として医事の功勞により十一月三日勲五等双光旭日章を受章し間もなくの逝去で誠に惜しみて余りあるものがあります。もつと永生きして斯道に又ボート部の指導にあたりて頂きたかつた。前島俊雄君(排球部主将)神戸高等商船を出て大阪商船(現大阪商船三井船船)にて世界を回航しその間三度の沈没漂流(二十五日間)、NHKテレビにも出演した。幸い存命し最後は同社の監査役となり悠々自適の身分であった。思へば松江中学排球部は昭和四年(二年生時代)に創設され好敵手島根師範(現島根大学、教育学部)と幾度か優勝を争つ

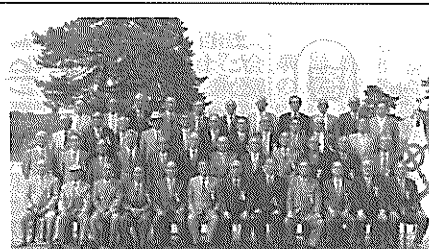
た。これが後に天下に名をなした紅綾クラブの生みの親である。又坂田治吉君(元四国管区警察局長、現弁護士)より海軍経理学校第四期補修学生会(四日会)にて刊行された「四日会々報」第五号に一部を抜粋した「撃沈」という冊子を頂き松江市内の同期生十五名に持廻り回覧し又總會に出席の遠方の同期生も回覧中です。特設水上機母船「神州丸」の激沈の様子が詳細に記述してあり、主計科の士官であり乍ら兵科の士官を指揮したその卓越した指導力は松中時代抜群の成績で卒業し、松高、東大法学部、内務省というエリートコースを経た俊才故であった。特に私は五年生のとき同じクラスの級長であり又登龍團の団長といふ間柄で特に懐かしい思いが致します。読者は皆異口同音に感動を覚えています。読者のご活躍を祈ります。尚関東支部は五月十四日(富士寮)に於て同期生会を開催。出席者十名意気軒高たるものがありました。以上

松中五十七期(昭和十二年卒) 卒業五十周年 野津 良夫

旧制松江中学校昭和十二年の卒業生は、今年が丁度卒業五十周年に当たります。百五十名の卒業生中七十名が亡くなつており、その内半数は戦死である。第二次大戦の前夜を在学中に過ごし、その後戦争、敗戦、復興への努力に追われる。まさに激動の半世紀であった。去る五月十日、記念行事として母校起雲館に集まるもの四十九名、その日は日曜日であったにも拘らず、校長先生教頭先生その他数名の先生達に迎えていただき校旗を前に記念の行事を持つことが出来た。出席率約七十%ということになるが、この年代の集まりとしては大成功であったといえよう。昔懐かしい館巻の「ロング」でお茶を頂き、二本松を背景に記念写真を撮った。一行は起雲館を出ると万寿寺に向かった。我らの仲間の数名の僧侶者によって級友物故者の法要が営まれた。読経の間に物故者全員の名前が読み上げられ、その誰彼かイメージが香煙の中に湧騰として浮かぶ感があった。その後玉造長楽園の大露天温泉で一風

呂浴び、赤山健児団の色分けをしたりリボンをつけて、宴会場に入った。なかには卒業以来初めてこの同窓会に出ると言う人もいて、初めは誰であるか見分けもつきかねたが、その禿げた部分や白髪を黒髪にイメージで覆い、鏡の部分で消して見ると、なるほどお前さんだったかやと言ふことになる。M先生の割れ竹で殴られたこと、J先生のスタンディング、べん先生の「じーどーてえったならばー(柔道と云うものは)」等、その夜の思い出話に尽きるところを知らなかったが、わけても皆の頭に強烈に残っているのは、安道湖一周である。実は、今年の初め、思い出の文集を作ろうと言ふことになり、原稿を募集し、「赤山の思い出」(百四十四頁)を完成して事前に配布したのであるが、圧倒的に多く使われた用語は「安道湖一周」であった。何人かは当時の状況を活写してゐるので、貴重な記録となつたとおもふ。(この本は母校に二冊贈呈した。)

なご寄稿の中には、物故者の遺族及び友人の回想十篇が含まれているが、意外と物故者の遺族の方の熱いこもった文を多数頂いて、感銘を深くした。我々ほとんどの者が屈折も多き人生を経て、今は現職を退いたものも多いが、しかし省みれば双松のものもき師よき友に恵まれ、鍛えられ育てられた五十年前の五年間の星霜を、いまあらためて誇りと感慨をもって想い起こしてゐる。双松よ、天籟の響きよ、永遠なれ。松高七期生 三十周年記念同窓会 杉原 螢子



松中四十七期(昭和二年卒) 藤 岡 茂

昨年八月十六日、ホテル一畑の高砂の間に於て同窓会は開かれました。すばらしい天候にも恵まれ、屋外での全員記念撮影をプログラムの皮切りに、始まりました。出席者総勢先生方十六名、生徒一七六名は予想を上回る出席率となりました。懐かしい先生の顔、三十年振りの顔、そして毎回皆勤の顔等全員の胸に付けた名札を頼りに三十年前を思い起しつゝ、あちこちで歓声が上がりました。松江を離れて、遠隔地に在住している人の参加が特に多く、準備側として、とても嬉しく、すばらしい盛り上がりを感じました。開会のことは、物故者への黙禱、実行委員長の森脇君の心に残る挨拶、母校の近況報告に続いて来賓の先生方の挨拶、母校への記念品の贈呈等と次第は進み、校歌斉唱では「松江高校」の歌詞もはつきりと唱いました。いよいよ乾杯と共に懇親会に入りました。各々恩師への挨拶に廻る人、松高時代の思い出を肴に食する人、語る人、自分の席も忘れて歩き廻る人、皆楽しそうに学生に戻つたひとときでした。家庭を忘れ、過ぎた三十年の歲月をも忘れて、妙に懐かしさだけが溢れる雰囲気を感じたのでした。川津校舎のきしみ音、学園祭のフレイヤーストーム等と思ひ出は、尽きること知らず、誰の頭の中をも過ぎた事と思ひます。時間は遠慮なく経過して行きました。五年後に元気で、又の再会を約束し、七期三十周年記念同窓会は終わりました。暖かな余韻を残しつゝ夜は更けて行きました。

松中四十七期(昭和二年卒) 藤 岡 茂

松高卒業三十周年九期同窓会 とき 昭和六十三年八月十三日(日) ところ ホテル一畑(松江市千鳥町) 会費 一万円(前もって郵便払込みでお願いする) 記念品料 一口 二〇〇〇円 (三十周年にあたり、母校に記念品を贈ることになりました。当日出席されない方も振り替用紙にて御送金願う。)

松高九期(昭和三十三年卒) 告 松高九期卒業同窓会は、来年の八月十三日(日) ホテル一畑で行います。九期同窓会生の皆さん、如何お過ごしでしょうか。お伺いたします。早いもので、私達は昭和三十三年三月卒業して、いよいよ来年は、節目の三十周年を迎えることになりました。気持ちだけは、まだ二十才代と思つていますが、いかんせん、頭にはちらちら白髪も混つてきて、記憶、体力も、ほんとうに弱くなってきています。でも不思議なことに、昔の事はよく憶えているものですね。そこで思い出多い、松高卒業三十周年を記念して同窓会を盛大に催し、なつかしい人と逢ふことによつて、少しでも若返りたいと思ひます。先日松江在住の同窓生が四十七名も集まっていたので、全国各地にお住まいの同窓生に一人でも多く帰松してもらおう様、話し合いました。詳細は来年六月頃迄には、各宛宛に郵送させていただきますが、ご要望なり、連絡事項等ありましたら、御一報下さい。尚世話人会で決定した事は左記のとおりです。

私達、松高七期生は、卒業三十年を記念して、大々的に同窓会を開こうと五年前の会で決定通り、開催に向けて頑張ることに成りました。校内幹事の吉野、野津先生を中心に各ルーム代表の準備委員は、前年の、六十年十一回を初回として、数回の会合を、準備劣りなく、当日を迎えました。

四百字詰原稿用紙二二三枚程度。原稿切昭和六十三年一月末日必着のこと。全員の投稿を御待ちしている。尚記念同窓会には特に多数の参加を期待している。母校の益々の発展と皆様の御多幸を祈つてやみません。 松高九期(昭和三十三年卒) 小林 忠夫

事務局長(校内幹事)の転出入 昭和六十二年四月の人事異動 転出 山根昭子(主司書) 高14期 松江南高 渡部達也(社) 高26期 津和野高 目次 転入 田中 瑞夫(校長) 松中66期 梅瀬 龍司(理) 高21期 廣野由起子(国) 高24期 秦 享子(事務) 高38期

「双松会」会報第八号をここに御届けします。御多忙の中、寄稿して下さいませ。目まぐるしい世界情勢の変化と日本に及ぼすその影響は、教育界にもその波が徐々に押し寄せてくるような気がする今日です。日本人はワーカホリック(仕事中毒)で、付き合いきれないとアメリカ、西欧諸国から非難を受け、歩調を合わせるように迫られ、その対処に苦慮する日本、そして日本人。非難に答えるには生活に「ゆとり」を持たねばと一人一人思う。しかし、長い間培われた価値観を交換させることは容易な業ではない。わかつてゐるんだが、ついつい...といつもながらの反省で終わってしまうのが常です。現状とあるべき姿を踏まえて教育に携わつていますが、北高の置かれた位置、使命を考えると、ついついいつも「日本人」に戻つてしまふと思ひます。近況、学生時代の懐かしい日々、思うところ等、何でも結構です。御遠慮なく、気楽にお寄せ下さい。「各期たより」もよろしくお祈りします。

双松会副会長 森本正紀氏(松中53期) 昭和六十一年十二月十五日 双松会副会長 並河 純氏(松中64期) 昭和六十二年 五月十九日 御逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

編集後期 双松会副会長 森本正紀氏(松中53期) 昭和六十一年十二月十五日 双松会副会長 並河 純氏(松中64期) 昭和六十二年 五月十九日 御逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。